

# 神に称賛される私たちの生き方

## 「判断の基準 自分がどこに？」

ピリピ 1:12～21

### ■ 最初に…

私たちにとって大切なことは、私たちの心が神様によって守られることです。様々な問題、様々な葛藤にある時に私たちはいつも心に流されて間違った判断を起してしまいます。どうか私たちが神様の前に立って、神様に賞賛される生き方を生きることが出来ますように。

### ■ 工事現場

あなたは工事現場に興味がありますか。私たちの周りで工事しているところに記憶がありますか。色々なところで工事しているが、日本人はどこで何をしているか興味がないのです。日本の工事現場ではシートで覆われていて、工務店名や景観を損なわないように写真や建物完成形等を表示しています。ニューヨークの工事現場では、シート等に穴がいっぱい開いています。なぜそうなっているのかと言うと、ニューヨーカーは知りたければ自分で見て調べると言う人間性から、何の表示もなく覆っているだけであれば、通り行く人々に破かれてしまう、穴を開けられてしまうため、あらかじめ何箇所か穴が開いています。私たちがもこのように神様に興味を持たなければなりません。礼拝をする中で、私たちがも神様のことやパウロの生き方について興味を持って考えながら、礼拝を捧げていきましょう。

### ■ 試練の中でパウロが学んだ喜び

「生きることはキリスト、死ぬことも益です。」ということとは自分がなくなっていくかなければならない。自分がなくなるとは、判断の基準が自分ではないということです。判断の基準がずれているので、試練に合うと嫌になり、奉仕をしていると自信がなくなる、信じる事が出来ない、与えるのが恐くなります。人間はずっと自分といつも闘います。そこで、自分がどこにいるのが大事となってきます。

①自分の思い・価値観 ②ルール ③目線（物質、恋愛至上主義、地位名誉）ルールとは何だったのでしょうか。自分が自分であるためにあるものです。ルールとは間違っただけではないというものではありません。

聖書が言うルールは、してはならない事が書かれており、自分が罪人であるという事を知るため、自分が悪いという事を知るため、過去のさまざまな悪い事を知るためです。私たちが少しでも今日より明日、この悪い中から出ようとする、本当の自分に戻ろうとするためである。

パウロは、ずれてきた人生、省みて見ると汚い心もありましたが、福音を前進させ、キリストのゆえに投獄されましたが、兄弟たちの大多数は、投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます神の言葉を語るようになりました。また、他の人たちは純粋な動機からではなく党派心をもってキリストを語り私を苦しめようとしている人々もいました。パウロの心の中には、腹が立つこともありましたが、「見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストを宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでます。そうです、今からでも喜びことしよう。」と語っています。情報がたくさん入ってくる中、対立もあつた中で、それでも自分を生かして喜ぶことを言っています。「というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。」（ピリピ1：19）

### ■ からし種の信仰

問題となるのは「他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。」（ピリピ1：17）

不純な動機で立ち向かってきても、パウロは「良し」としました。何故でしょうか。救いのためです。私たちのまわりにも攻撃してくる人がいるかもしれません。自分を駄目にしてやろうと批判してくる人もいるかもしれません。悪者にしようとする情報を聞くかもしれません。そんなつもりはない自分が聞いていると責められているような気持ちになってくる時もあります。時には、真逆な方法で、奉仕について、信じる事について、与える事について、本位とは違うような言葉をもって自分に語りかけてきて、「あなたは駄目だ、役に立たない、神様の働きは出来ない、信じられない。」と言われていた気になったりします。そのような中、ではどうすれば、信仰者になれるのか。どうすれば大きな信仰を持てるのか。イエスキリストは「からし種の信仰が良い。この小さな事を信じなさい。」と言っていました。パウロはこの小さな事を信じて選びました。自分は苦難の中にあっても、必ず神様は苦難を益にすると信じました。私たちは、偽りの情報を信じて、また、否定的な言葉を聞いてしまいます。本当に信じなければいけない小さいこと、私たちは神様の子どもです。

### ■ からし種ほどでも信じる事ができない私達

私達は神の子どもであるのに、なぜ偽りの情報を信じてしまうのでしょうか？それは自分が心の中心にいるからです。自分が判断しているからです。私はすぐ

いという傲慢な心も私は駄目だ、出来ないという心もどちらも同じ「自分が中心」となっていることが問題なのです。自分が責められたり、自分が悪く言われていると腹が立ちます。パウロは、そんな中でも、「それでも見せかけであろうとも、真実であろうともいいではないか、キリストが伝えられているではないか、福音が伝えられているではないか。」とすることができました。

私たちは神様のことを信じる事です。小さな事を信じる事です。神様がせよと言われたことを信じて行く事です。信じなければいけないのは、信仰がない自分ではありません。駄目でうまくいかない自分でもありません。傲慢な自分でもありません。神様がこんな私も選んだと思う信仰、神様がせよと言われたことを信じてます！という信仰です。

### ■ 判断の基準

最後にパウロはこう言います。それは私の切なる祈りと願いにかなっています。自分に反発して党派心を持って燃えてくる奴。まさしく自分です。党派心を持って戦いを挑んでくる奴は昔の自分であると気付いたのです。あなたがその相手と一緒にであるということ。比較したり、出来ないと思ったり、劣等感を感じたり、傲慢でも優越感になっても自分がしている事はそれと一緒にです。今、この試練にあっているのであれば、ここを乗り越えなければいけないのです。そのことに対して自分がまだいる。まだ自分が決定している。まだ奪われたくないと思っている。良かれ悪かれまだ自分が決定したいのです。そこが問題なのです。

『いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。』（ピリピ4:4）試練で落ち込んでいるなら喜びなさい。自信がなくなっているなら喜びなさい。どうやったら信仰を持てるのか、信仰者になれるのか、それを信じる事。小さいことを信じる事です。そして、自らが衰える事です。判断基準が自分ではないということです。とことん自分を捨て去る事です。

「祈りとイエスキリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。」「私の身によって、キリストがあがめられることです。」この御言葉が合わさり、自らが衰えた時、私たちが信じると、自らの中に主イエスキリストが生きるのです。生きることもキリスト、死ぬにも益である。死んでも益になるのです。

### ■ 島 秋人

短歌の詩人で、晩年に牢獄でクリスチャンとなります。幼いころ先生から暴力をふるわれ、ひどいあだ名が付けられていました。24歳の時、お金が無く空腹で、魔がさして家に侵入し、お金を盗んでしまい、それが主人に見つかり押し問答になり、主人は倒れ亡くなってしまいました。裁判の判決で死刑囚となってしまいました。そして、牢獄の中で詩「世のためになりて死にたし死刑囚の眼はもらい手もなきかも知れぬ」「主のみ手にすがる外なき囚われに冬のさ庭の陽があたたかし」

牢獄の中で書いた多くの言葉によって福音を伝えました。どんな人生が正しい私たちにわかってはくれないのです。ただ、今言えることは、あなたにはチャンスがあるのです。あなたはできます。あなたが今、神様が今日あなたを選んだことを信じればよいのです。

### ■ 最後に…

私にはできないが神様にはできるのです。あなたはこれを信じますか。このことを確信していますか。信じなければいけないのは、からし種の信仰です。私を選んだのは神様です。「私を呼べそうすれば私はあなたにこたえあなたの知らない大いなることをあなたに告げる。」「恐れるな虫けらヤコブ私があるあなたの神だから。あなたの足の踏むところはどこでも私はあなたに与える。」信じてください。諦めないでください。どんなことがあってもあなたに語られる偽りの言葉を自分の中に取り入れなくてください。全ての、良い言葉も悪い言葉も聖書に照らし合わせて、御言葉を取り入れてください。そうすれば、ずれることはありません。

批判されても、注意されることも褒められても、評価されていても、そのままでは意味がありません。御言葉に照らし合わせ、自分が判断するのはなく、神様が判断するのです。

神様はたとえ人があなたを批判しても、その弱さを取り去るために十字架に架かりました。私たちは神様を信じて後ろをついて行きます。

『主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます。』使徒16:31)

(要約者：西寄達也)

(2021年9月26日)